

## 「寛永十六年がれうた船渡海禁止高札」他

Research Materials

小島道裕

二〇〇三年度末に、京都所在の旧商家から江戸期の高札三点が寄贈された。この内、表題のものはいわゆる「鎖国令」の高札として特に注目されるものである。翌年度の「新収資料の公開」の際に原品を展示したが、ここで改めて紹介することとしたい。

## 1 「寛永十六年がれうた船渡海禁止高札」(写真1—1・2・3)

〈釈文〉

條々

一日本国被<sub>レ</sub>成<sub>二</sub>御制禁<sub>一</sub>候きりしたん宗門之儀、乍<sub>レ</sub>存<sub>レ</sub>其弘法之者于<sub>レ</sub>今密々

差渡之事、

一宗門之族、結<sub>二</sub>徒党<sub>一</sub>企<sub>二</sub>邪之儀<sub>一</sub>、則御誅罰之事、

一伴天連同宗旨之者かくれ居候所へ、彼

乃国々つ、けの物(送)あたふる事、

右、因<sub>レ</sub>茲、自今以後かれうた渡海之儀、被<sub>二</sub>停止<sub>一</sub>候事、(此)上、若差渡<sub>二</sub>をゐては、破<sub>二</sub>却其舟<sub>一</sub>並乗来者悉

處<sub>二</sub>斬罪<sub>一</sub>乃旨、仰被<sub>レ</sub>出候也、  
仍執達如<sub>レ</sub>件、

(六三九)  
寛永十六年七月五日

対馬守(阿部重次)

豊後守(阿部忠秋)

伊賀守(松平信綱)

讃岐守(酒井忠勝)

大炊守(土井利勝)

掃部守(井伊直孝)

江戸幕府老中奉書そのままの文面であり、『御触書寛保集成』(二一  
一、二二八)、『徳川禁令考』(前集六、四〇五三)、『御当家令条』(巻  
一六、二〇〇)などの法令集で確認することができるが、いくつかの誤  
字・脱字がある他、署判が一名少なく、これは三人目・四人目を、本来  
「伊豆守・加賀守」とあるべきところを誤って「伊賀守」としたため  
ある(「加賀守」は堀田正盛)。



写真1-1 寛永十六年がれうた船禁止高札(表)

〈形状〉  
縦最大五四・〇cm、横九〇・五cm、厚さ二・七cmの大型の駒形一枚板に  
屋根(幅四・五cm)が付けられている。中央下部の木目部分には横方向  
に割れ目が生じ、両側面にかすがいが打たれている。板面の風化はかな  
り進み、墨色は完全に落ちて、凹凸でかろうじて判読できる状態である。



写真1-2 寛永十六年がれうた船禁止高札(裏)

写真1—3は斜光線によって撮影したものである。

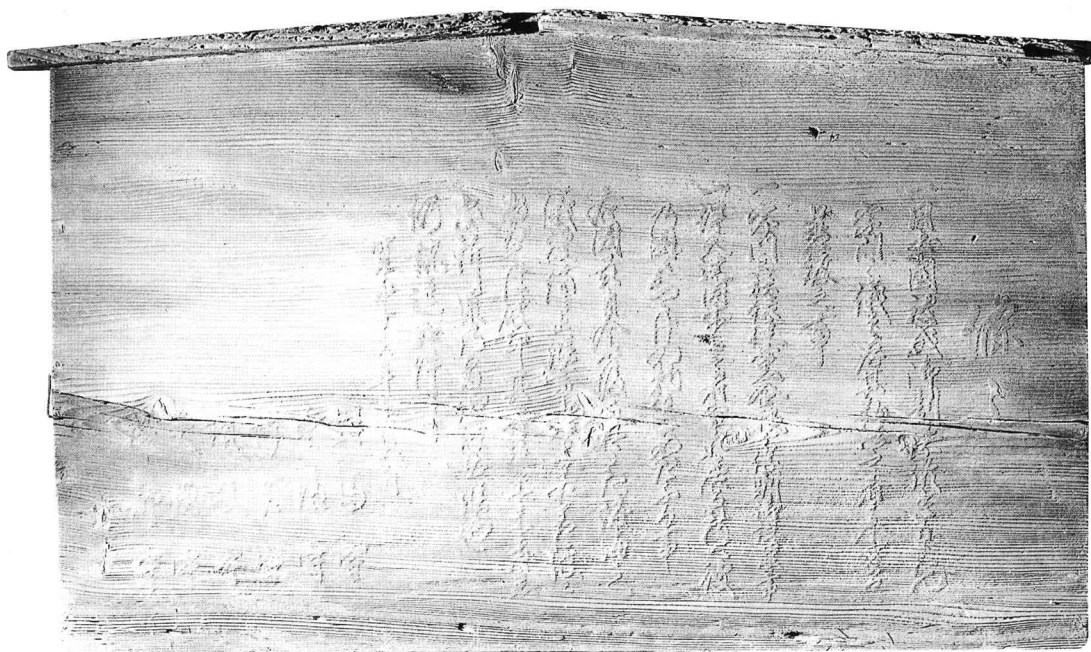


写真1—3 寛永十六年うがれうた船禁止高札  
(表、斜光線により撮影)

板面に釘穴や柱を取り付けた痕はなく、どのように掲示されていたかは正確にはわからないが、両側面に二ヶ所ずつ凹みがあり、そこから被熱した形跡があることから、何らかの高札場の場所に置かれて、側面を金具などで支持されていたと一応推測される。表面の下部にはいくつもの当たり傷があり、下部が支持具で固定されていた痕跡と思われるが、旧蔵者宅では以前長押に置かれていたとのことなので、その時に付いた可能性もある。この他、現状では裏面上部にねじ釘式の吊り環が取り付けられ、紐の残欠が付いている。

板にはいくつかの焦げ痕もある。変色(炭化)の仕方からは、両側面のかすがいおよび凹みに当たっていた支持具から熱が伝わったと考えられ、高札場の両側の柱が燃え、高札自身に着火する寸前に取り外されたためと推定することができる。この他にも、表面上部には鋭い金属板状のものが刺さって熱が伝わったような焦げ痕、裏面中央左下には何かが押し当たったような焦げ痕がそれぞれ認められる。

焦げ痕のある制札は他でも実見される場所であり、火災の際には、はずして守らねばならない存在であったことを示している。

〈発給と伝来について〉

この高札の内容は、寛永一六年(一六三九)に出された、いわゆる「鎖国令」の最終的なものとして知られる、うがれうた船(ポルトガル船)の来航を禁止した老中奉書である。老中奉書をそのまま高札とした例はきわめて珍しく、まずこの点が注意される。

高札を考える上では、この内容がどのようにして周知されたのが問題となるが、『御触書寛保集成』によれば、この時に出された一連の四通には、次の様な注釈が記されている。

まず四通全体の前に、

「太田備中守 御前え被」 召出、御用之覚書被「渡下」、所謂、

とある。

一通目、すなわちこの老中奉書には、

「右、かれうた御仕置之奉書」とあり、

二番目の不審船・不審者の扱いを定めた奉書（署判は対馬守・豊後守・伊豆守）の後には、

「右、諸大名え被<sub>レ</sub> 仰出<sub>二</sub>浦々御仕置之奉書」とある。

残りの二通はそれぞれ唐船の乗員およびオランダ人に宛てたものであり、四通目の後には、

「右四通、備中守持参之覚書之写也」とある。

そして全体の後には、次の様にある。

国持大名并一万石以上之面々依<sub>レ</sub>召登<sub>二</sub>城、太田備中守長崎え就

被<sub>レ</sub>差遣<sub>二</sub>之、上意之趣、於<sub>二</sub>御白書院、井伊掃部頭、酒井讃岐

守、堀田加賀守、松平伊豆守、阿部豊後守、阿部対馬守列座、右諸

大名え讃岐守被<sub>レ</sub>申渡<sub>二</sub>之、かれうた御仕置并諸大名え被<sub>二</sub>仰出<sub>二</sub>

浦々御法度之奉書両通は、於<sub>二</sub>其場<sub>（林羅山）</sub>道春説之也、

すなわち、この奉書は、幕府から六人衆（後の若年寄）の太田備中守

（資宗）が上使として長崎に遣わされるにあたり、江戸城で諸大名らに

申し渡されたものであり、特にこの奉書と二番目の「浦々御仕置（御法

度）」は、その場で林羅山が読み上げるといふ念を入れた形で伝えられ

ている。

このようにして諸大名らに周知され、長崎に伝えられた後は、ポルトガル船が来航する可能性のある港に対して、密告に対する褒美の規定もある「浦々御仕置（御法度）」が高札などの何らかの形で周知されたはずだが、それと同時に、この「かれうた御仕置」の老中奉書も、書き写されて高札場に掲げられた場合があったことは十分考えられる。この高札は初めて発見されたその一つであると見なすことができよう。

ただし、それが実際にどこに掲示されたのかは明らかでない。京都の

古い商家に所蔵されていたことから、貿易商の集まる京都の一面にこの高札が掲げられていたという可能性を考えたいところだが、後述する様に、同時に所蔵されていた三点の高札の一つには美濃の村名が記されており、後に収集されたものである可能性が高い。所持者の権利を保障したものではないこの「鎖国令」高札が、いかなる理由でどこに所持されていたのかは興味深い問題だが、京都に掲示されてそのまま伝来したと考えることには慎重である必要がある。

## 2 「偽金銀銭禁止高札」（写真2—1・2）

〔釈文〕

似せ金銀銭拵候もの、并売捌候もの、雖<sub>レ</sub>為

御制禁、近來奥羽筋専行ひ候もの

在<sub>レ</sub>之候<sub>二</sub>付、今度吟味之上、夫々被<sub>レ</sub>所<sub>二</sub>嚴科<sub>二</sub>候、

就而者、右両国者勿論、国<sub>（く）</sub>嚴敷可<sub>レ</sub>被<sub>レ</sub>遂

御穿鑿<sub>二</sub>候条、銘々無<sub>二</sub>油断<sub>二</sub>相改、自然

疑敷もの<sub>二</sub>在<sub>レ</sub>之者、早々其筋<sub>（江）</sub>可<sub>レ</sub>申出<sub>二</sub>（候）、

品<sub>（寄）</sub>御褒美被<sub>レ</sub>下、其ものより仇を

なさ、る様、可<sub>レ</sub>被<sub>二</sub>仰付<sub>二</sub>候、若見聞およひ

なから隠置、他所より顕はる、<sub>（二）</sub>おいてハ、

其所之者迄も罪科<sub>（二）</sub>可<sub>レ</sub>被<sub>レ</sub>行候、

右之通、從<sub>二</sub>

公儀<sub>（被）</sub>仰出<sub>二</sub>候間、急度可<sub>二</sub>相守<sub>二</sub>者也、

寅八月

偽金銀の禁止自体は江戸期の高札に一般的なものだが、「奥羽筋」での偽金銀銭づくりという具体的な問題について書かれたこの制札の内容は、『御触書集成』などの幕府法令集に見あたらないものであり、どの



ような背景があるのかについても今のところ未詳である。年記の「寅八月」についても、江戸前期と思われるが、特定に至っていない。

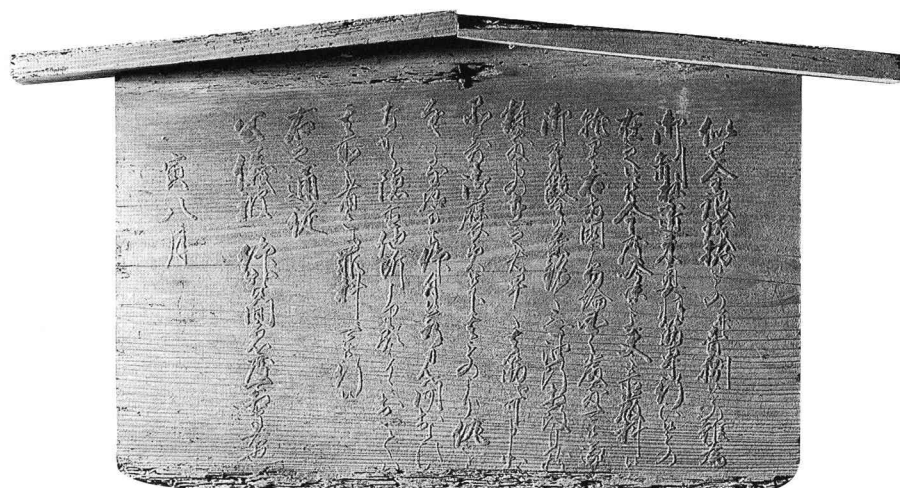


写真2-1 偽金銀銭禁止高札  
(表、斜光線により撮影)

〈形状〉

縦最大三・五・五cm、横五三・八cm、厚さ一・七cmの駒形の板に、屋根(幅七・二cm)が付けられている。下部は虫損が激しく、若干欠失している。表面は風化して、墨色は殆ど落ち、文字は浮き彫り状になっている。写

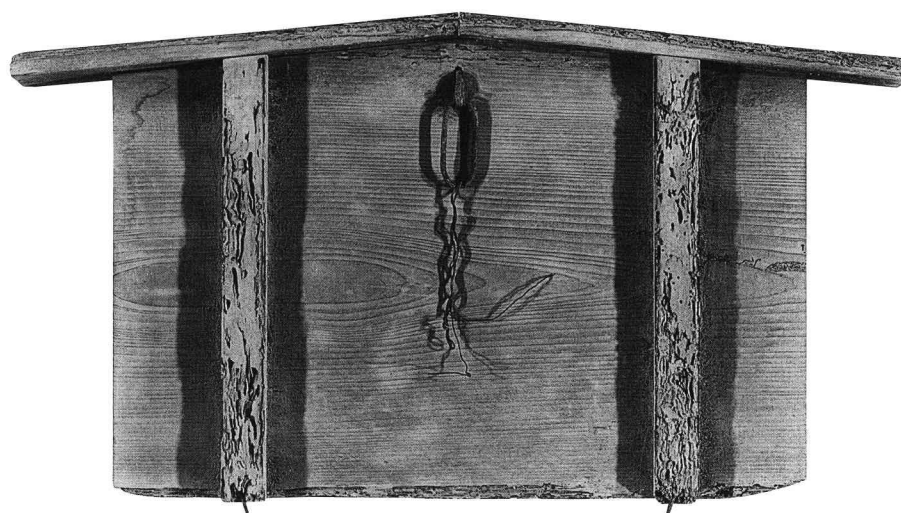


写真2-2 偽金銀銭禁止高札(裏)

真2―1は斜光線によるものである。背面には、縦に二本、角材（幅三・三cm）が溝にはめ込まれている。その各の底面には先端の尖った釘が刺さっている。また、板面の中央上部には穴が開けられ、回転可能な鉄製の吊り金具が取り付けられている。裏面側の環状の部分には、現状では針金が付いている。

### 3 「明和七年徒党・強訴・逃散禁止高札（徒党札）」（写真3―1・2）

〈釈文〉

定

何事によらず、よろしからざる事に百姓

大勢申合せ候をとと<sup>（徒党）</sup>となへ、ととうして

しゐてねかひ事くハたつるを<sup>（強訴）</sup>こうそと

いひ、あるひハ、申あハせ村方たちのき

候をてうさんと申、前々より御法度<sup>（逃散）</sup>ニ候条、

右類の儀これあらハ、居むら他村にかき

らす、早々そのすし<sup>（筋）</sup>の役所へ申出へし、

御ほうひとして、

ととうの訴人

銀百枚

こうその訴人

同 断

てうさんの訴人

同 断

右之通下され、その品<sup>ニ</sup>より帯刀苗字も

御免あるへき候間、たとへ一旦同類<sup>ニ</sup>成ルとも、

発言いたし候もの、名まへ申出るにおゐてハ、

その科をゆるされ、御ほうひ下さるへし、

一 右類訴人いたすものもなく、村々騒立候節、

村内のものを差押へ、ととうにくわゝらせす、

一人もさしいた（ささ）る村方これあらハ、村役人

にても、百姓にても、重<sup>モ</sup>にとりしつめ候ものハ、  
御ほうひ銀下され、帯刀苗字御免、さし  
つゝ、きしつめ候ものとも、これあらハ、それく  
御ほうひ下しおかるへき者也、

（七七〇）  
明和七年四月 奉行

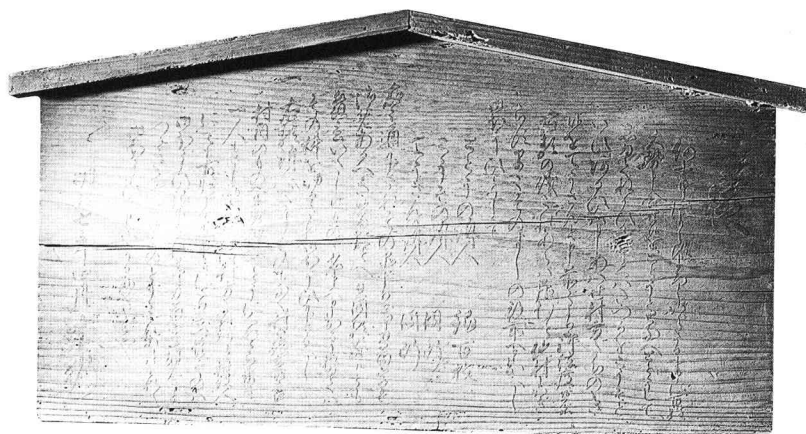


写真3―1 明和七年徒党・強訴・逃散禁止高札  
（表、斜光線により撮影）

(裏面)

癸

丑年五月

石津郡

多郎郷

前夫村

「徒党札」として知られる、江戸後期の高札場で最も一般的なものの

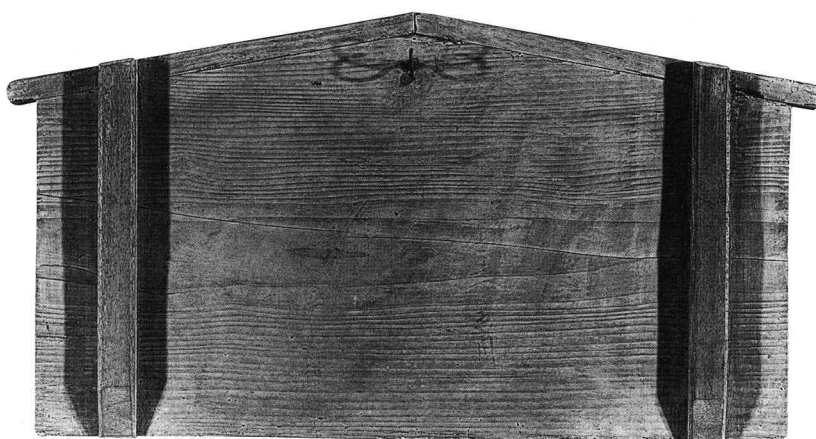


写真3-2 明和七年徒党・強訴・逃散禁止高札(裏)

の一つである。

裏面に記された「石津郡多郎郷前夫村」は、現在の岐阜県養老郡上石津町にあたり、この高札が掲示されていた村と思われる。このことは、先述の様に、これら三点の制札が、ある時点で収集されたものであることを示唆していると言えよう。「癸丑年」は、寛政五年（一七九三）か嘉永六年（一八五三）だが、おそらく前者だろう。

〈形状〉

縦最大四〇・五cm、横七五・五cm、厚さ二・五cmの駒形一枚板に屋根（幅四・五cm）が付けられている。背面には、縦に二本、面取りした角材（幅三・七cm）が溝にはめ込まれている。板面はやや風化して文字が浮き彫り状になってきているが、表面の墨色は多少残っている。板面に穴はなく、現状では背面中央上部にねじ釘式の吊り環が付けられ画鋲が一つ押されている。

展示に際して

二〇〇五年一月～二月に当館で行われた「新収資料の公開」における展示に際しては、内容の理解を図るためと、高札には「読み聞かせる」という意味が多分にあったであろうことを考慮して、読み下しと現代語訳を受話器型の装置で聞ける様にした。

また、実際に掲示されていた高札の常として、墨色がほとんど落ち、凹凸でかろうじて読める状態であるため、スポットライトを横方向から当て、斜光線によって凹凸を強調できる様にした。懐中電灯を当てて判読する研究者と同じ体験をしてもらうことを意図したものである。（以上写真4）

読み下しを録音する際には、誤字・脱字があるため、読みに困る部分が少なからずあったが、そのことで改めて気が付いたことがある。

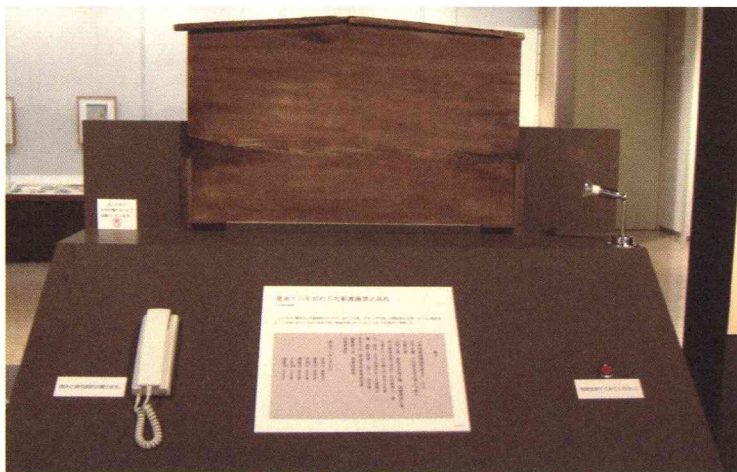


写真4 「新収資料の公開」(2005年1月～2月)  
における展示の状況

中世の制札(高札)との関係で言えば、中世のものは、寺社や村町などの個別の対象に当てて発給され、治安維持や負担の免除など、受給者の権利を保障する内容であることが通例だが、江戸期のもものは、不特定多数に対して出された一般的な法令、すなわち禁止や命令であり、受給者がそれを掲示することで利益を得るものではない。誤字脱字が多いのは、ある意味で当然なのであった。

#### 付記

今回紹介した三点の高札は、当館の企画展示「日本の神々と祭り」展示プロジェクトに八坂神社文教部の五島健児氏が参加されたことからその所在が知られ、調査の結果、貴重な歴史資料として当館に寄贈されることになったものである。

当初の調査には、紹介者である五島健児氏と、企画展示の代表者・進行管理担当者であった民俗研究系の新谷尚紀氏と関沢まゆみ氏、および歴史研究系の久留島浩氏(近世史)が当たられた。館内での調査に際しては、総研大院生の岡田あさ子・長田直子・工藤紗貴子・工藤航平および特別共同利用研究員として在籍中であつた上智大学院生中野純各氏の協力を得た。

当館の所蔵となつてからは、中世の制札を扱っていた筆者が展示を担当し、この紹介も執筆することとなったが、以上の各氏からのご教示に基づく部分が多い。記して謝意を表したい。

(国立歴史民俗博物館研究部)  
(二〇〇五年一月三〇日受理、二〇〇六年八月一〇日審査終了)